

酒飯論絵詞

(五)

八木 意知男

(京都女子大学短期大学部教授
裏千家学園講師)

(現代語訳)

飯室律師が申し上げるには、

(長持めが) 酒飲者の徳をいいつのり、
下戸の普段の心までも悪くおっしゃる
のは謂われないことです。

そもそも仏の五戒(ごがい)にも「御酒戒」とて、
酒を戒めていらっしゃる。酒を造り売
る人も、多くの米穀を(発酵させ)腐
らしているが、これは仏の教えに背く
ことです。後世(ごせ)の程も知られます。

ですから(中国夏の) 禹王は儀狄(ぎてき)の
造った酒の旨さを認め「将来、国を滅ぼ
すものは必ず酒であろう」とおっしゃっ
て、(飲むことを) 堅く戒めなされた。
夏の桀王・殷の紂王は酒池のために(誅
せられて) 天下をなくされた。孟子の
言葉には「好んで酒を飲む者を第一の

不孝者とする」と。李太白は酒に狂って

入水し、天寿を完うしなかつた。漢の項

羽と高祖はどちらも大酒を嗜みなさつ

た。しかし高祖は項羽を騙すため酒を断

ち、何年も経て終に項羽を滅ぼしなさつ

た。長安の倡家の娘こそあまりに酒を

愛したが為に、(伝えられていた) 琵琶

の秘曲を忘れてしまつて、その身を流浪

の中に捨ててしまつた。

本朝、(『源氏物語』で) 光源氏が須磨

へ流されなされた原因を尋ねれば臘月夜

の事、酔い心地のあまりに(ふらふらと

徘徊し)、内侍臘月夜に出会つてしまわ

れた。大酒を飲んで正体ありません。

二日間酔っている中に気が大きくなり、

自棄な事を考えた(結果です)。よくよ

く物事を考えてみると、世の中の見苦し

い事は皆上戸の仕儀です。

(一方、下戸の飯事は) よろずの祝事

の座敷にも、先ず円鏡(丸餅)を雑煮

とし、国中の珍物を料理として七五三

まで据え並べたとしても、本飯をこそ賞

玩(の中心と)すべきです。相撲・田返し・

力業と(何れも) 大食なくてはなりま

すまい。先ず青陽の朝(春のはじめの朝)

には若菜を摘んで調理する。桃花の宴

の赤飯は、(桃の) 花の色に映えましょ

う。夏は涼しい筍や瓜・茄子・大角豆・

たたみ汁、麦飯なども結構です。(そう

こうしてる間に) 早くも初秋となつた

らば、蓮子飯、(蓮であるからその場に)

坐る時仏法の力も(湧き) 出て来ます。

盆には人の志、店経のため檀那に呼ば

れて行く時には、地藏の頭のような高

盛り飯が六道迷わぬ便りの品で、後世を
かけて頼もしい。冬の空ともなれば、引
き困った座敷で囲炉裏を開き、茶の湯を
して、気心の知れた友だちが寄り合っ
て、今日の会席料理は何をしよう（と考
える）。納豆汁や茗荷汁、椎茸・平茸料
理して細辛飯（葉膳めし、今日の煮込御
飯）こそすばらしい。ゆり（寄合い）や
勝手（台所、おかつて）を見回すと、「東
郊」「西郊」「落葉松穂」等の極上無上の
茶を詰めて、その上また、茶入では菓
丸壺、肩付を袋に入れたのは見事だ。「高
麗茶碗」「南蛮の水指」「蓋置」を取り出
して並べ置き、露を持った花入に水仙の
花などを挿し置くと、見るからに心の穢
れがなくなり、酒盛りをしている人に比
べて風流だろう。

上戸は、食を工夫しながら膳に向つて
も食べられないから妻子を悪く言い、眇
目をつかい、また「酒の燭をしなさい」と、
誰も強要してもいない酒を飲んで寝たり
起きたり落ち着かず、体裁繕いをする。
遊び上戸の癖として此処や彼処へ転び出
して往来の人の物笑いとなり、少し酔い
が醒めた時は面目無げな様子で首隠めて
いる顔を見ると、狸が通世したようで片
腹痛く可笑しい。（そんなことがあつて
も）まだ懲りずに再び酒の友を招き、時
節にも合わぬ肴を乞い、大盃を取り出し
て、人が（「何事があつたのか」と問い
もしない酒盛りを強制し強要されて、飲
む時は大声でもつて意味の通らないこと
を喚きちらし、人の傍で諸肌をぬいで人
目も恥もすっかり忘れ、「何やらおかし
なお座敷だ」と（人の）笑い草になる上
に、行いが度をこすこともあり、言い足
りない事はまだまだ多い。よほど酔つた
折りには、さらに「水じゃ、水が飲みた
い」と言いながら動き回り、手水や水槽
を見つけては庭の方へよろめき出て、何
処ということなくこけまわつて足や手を
傷つけ、あげくに顔も傷つけて襟にも袖
にも血をつけて、ぎよつとするような有
様は見た目も暗れず鬱陶しい。こんなこ
とがあつてもまだ懲りず、初中終大酒を
飲んで酔興をし、親しい仲間とも疎くな

り、あまりに酒が行き過ぎれば顔が真っ
青に見える者もあり、血走つた顔もあ
り、全く正体もないかぎりだ。
心静かに法花経を誦して、現世（娑
婆）に在る生きとし生ける者が全で一
緒に大白牛車に乗つて、さあ寂光浄土
へ行こうではないか。
飯室律師が（酒にあらずして）餅は、
飯は、」と思うならば、（私のことを）則
身仏ではないかと人は見るに違いない。

注

1	殺生・偷盜・邪淫・妄語・飲酒の五つの戒め。
2	『戦国策』巻七・魏策恵王など。
3	『列女伝』夏桀末喜・『韓詩外伝』四など。 李白が酔つて、月を捉えようとして海に落 ちて死んだ話は大層有名であるが、具体的 な根拠はなく、降世につくられた伝説とさ れている。
4	項羽は楚の武将。漢高祖と劉邦にやぶれた。 虞美人との話が有名。
5	白楽天「琵琶行」。
6	上戸はあまり飯を食さぬ故、飯中心の記述 となつてゐる。
7	「六趣」とも。地獄・餓鬼・畜生・阿修羅・ 人間・天上のこと。
8	

（追記）この段以下、乱れ多く意味が通らない
部分あり。